

イノベーションを支える深圳のサプライチェーンとエコシステム

所在地：
深圳、中国概要：
日本企業向けに製造受託・品質管理・検査代行やアフターサービスなどを行う。URL：
<https://www.jenesis.jp/>

深圳を見て見ぬ振りをしてきた日本

日本と深圳のあいだにはすでに浅からぬ関係がある。三洋電機がここに大きな工場をつくったのは、深圳が中国で最初の経済特区に指定されてから3年後の1983年のこと。以後、経済の浮き沈みのなかでも、多くの日本企業がこの街の製造業の発展にも寄与してきたことは事実だ。とはいえ、長らく日本人の「深圳観」が大企業および製造業の側から見た一方的なものであったことは否めない。

「深圳駐在員の深圳知らず、ですからね」と話すのは、2011年に深圳でジェネシスという会社を創業

した藤岡淳一氏だ。「日本企業に勤める彼らは毎朝、『日本経済新聞』を読み、オフィスでは日本語を話し、週末はマカオでゴルフをするような人たちが多い。南山地区のハイテクソフトウェア・パークで何が起きていくかにも、まったく関心をもつてこなかった」

一方の藤岡氏は2001年以来、デジタル機器を扱うベンチャー企業などに勤めながら、さまざまな形で深圳の製造現場と深いつながりをもってきた。21世紀の深圳がどう変わってきたのかを、内部からつぶさに見てきたという稀有な経験をもつ人物である。

「日本のテレビや新聞、雑誌など大手メディアにも責任があったと思います。彼らがこの10年間、中国のことをあまりちゃんと報じてこなかった。中国の経済や技術力は伸びているが、やがて崩壊するだろう……そんな風に書かなければ記事にならない、と記者たちがこぼしていたのを聞いたことがあります。要は、日本はこの間、深圳を見て見ぬ振りをしてきたんです」

深圳のサプライチェーンがもつ力の源泉とは何か？

では藤岡氏が知悉する深圳のローカル・サプライチェーンとはどんなものなのだろうか？ それは、南山地区で今、怒濤のごとく起きているイノベーションを支えるものでありながら、より深く地域に根ざした一種のレガシーとも呼べるものだという。そして藤岡氏は深圳のサプライチェーンを「あらゆるベンダーや業種が数百、数千という単位で密集する、深い森のようなもの」に喩えた。

「かつては深圳も大ロット少品種のものづくりが中心でした。しかし、人件費の高騰や求められる製品の変化により、2000年代は大ロット多品種生産によるノーブランド製品が普及します。今はさらにIT技術駆使した小ロット多品種生産が増えていますが、そのとき設計や基板（公板）パブリック・ボード（ゴンバン）、さらには金型による外装（公模）パブリック・モールド／ゴンモウ）をシェアすることで、より素早く小ロットでの生産が可能となりました」

2000年代には「山寨（にせもの）」と呼ばれる携帯電話が、深圳の代名詞ともなった。ある意味では融通無碍なコピー文化に起源をもつ

とはいえ、こうしたオープンソースの技術や情報のシェアが、やがて深圳におけるハードウェアづくりの強みになっていったことは興味深い。そして細かい設計情報の交通整理を行っているのが、深圳の深い森（エコシステム）における道案内ともいえるべき存在、「方案公司（ソリューション・デザインハウス）」である。



右/ジェネシスの社屋外観。
左/お話を伺った藤岡淳一氏。



上/深圳のサプライチェーンを支える賽格(さいかく) 広場。
中/賽格広場の中には多くの店がひしめき合う。
下/テナントでは無数の山寨(にせもの)も販売されている。

来てもらったのに残業が20時間しかない月があると、『ここは嘘つきブラック企業だ』と言われてしまうのです……」

日本とはまったく逆の状況に苦笑しながらも、この人手不足や人件費の高騰がこれからの深圳に暗い影を落とすかもしれないと懸念もしている。工場の自動化を進め、派遣労働者を活用するなどして凌いでいるが、ハードウェアの組み立てという事業の性質上、限界はある。しかし、森のようなサプライチェーンがあり、日本にあるニーズが小ロット多品種である以上、深圳から離れるという選択肢は考えにくいという。

「深圳の変化はスピードがものすごく速いですから、来年や再来年となればどうなるかはまったく分かりません。そういう変化の速い深圳に生かされてきた、と私は感じていますから」

日本のものづくりの現状については、どう考えているのだろうか？ 藤岡氏の意見を聞くと、その表情はさらに厳しいものになった。

「グローバルスタンダードだと言っている割には、深圳からも、世界からも完全に残り残されていると思いませんね。ものづくりを効率化したり、ビジネスを効率化したりするなら、いろんな意味でこの基準を意識した

方がいいと思います。彼らは、上げることがしても下げることがほしくない。要するに、何もかもがオーバースペックなんです。それだけ、守るべきバグが重いということなのでしょうが……」

それでも多くの日本の経営者が、ようやく深圳のものづくりにも目を向けはじめたところなのではないだろうか？

「日本の大企業のトップは、どうしてもいまだに中国のことを下に見ていますね。よく深圳のスタートアップ企業に出資してもいい、なんて話を聞くんですが、あまりにも感覚がズレていて、やたら細かいことに口

だししたりするものだから、すごく評判が悪いんです。よく、このままだと日本も追い抜かれるなんて言いますが、いやいや、とくに抜かれている……と思いますよ。日本の製造業でも、もっと若い世代の経営者が活躍するようになれば、もう少し違うのかもしれないけども」

悲しいことに、深圳の工場から見える日本の姿は、遠くにあつて理解しがたいものであるようだった。日本人であり深圳人でもあるジェラルド・フー氏の、苦悩とも困惑ともとれる表情のなかに、私たちは未来の日本のあり方を真剣に探っていかなければならないのだろう。

彼らがいることで、製造に必要となるひとつひとつの部品のコストまでが短期間に計算可能となるというのだ。

「私は今もこの森の住人として暮らしていますが、この仕組みはすごいなと思っています。すべての部品について、互換可能なものが5種類から10種類もあるんですよ。だから、同じ機能をもつ機械でも、より信頼性の高い『松』から、粗悪品の『梅』、中間の『竹』といった具合に『松竹梅』を揃えることも可能となります」

いくら設計図があっても、一から部品を集め、そのすべてで相性や品質、コストを確かめながら仕様を詰めていくのは、膨大な時間がかかる作業だ。しかし、方案公司がつくる「BOMリスト(Bill Of Materials)」によって大幅に手間が省けるという。ジェネシスが日本向けに生産しているのは、深圳における最高品質、つまり「松」の製品。それでも、日本の製造業の基準からいえば、ときに「粗悪品」のレッテルを貼られることもある。しかし、大手タクシー会

深圳の未来と日本の製造業の今

社の車載器、学習塾の教材用タブレットなど、むしろサービス業からのニーズはひじょうに高い。日本の製造業なら到底不可能であろう小ロットのハードウェアを、ニーズに合った適切な形でスピーディに、しかも安価に生産できるのはここ深圳だけなのだ。

ジェネシスでは、この日本向けのニーズに応えるために自社工場をも

ち、独自の生産ラインをつくって従業員を雇っている。藤岡氏自身、現地風に「ジェラルド・フー」を名乗り、文字通りこの「森の住人」となったからこそ可能な仕事を続けている。

「今の深圳は人手不足が深刻で、とりわけブルーカラー(製造現場で働く従業員)の採用が大変なことになっていきます。やっと面接までこぎ着けると、『御社は1カ月に残業がどのくらいありますか?』と聞かれる。『50時間はあるよ』と言って



上/会社のロゴが目立つ広々としたエントランス。
中/ジェネシスの製品が所狭しと並べられた陳列棚。
下/工場では多くの女性たちが働いている。